

プリマヴェーラを読み解く

世界でもっとも有名な絵画のひとつ、ボッティチェッリの「プリマヴェーラ」は、イタリア、フィレンツェのウフィツィ美術館に所蔵・展示されています。

約 2m×3m の大きなこの絵画は、そこに何が描かれているのか、様々な解釈が論じられてきました。いまだに専門家の間でも意見が分かれるものもあります。

絵画をともに見ながらその意味について討論しあうのは、芸術を楽しむ最上の時間ともいえるでしょう。

いくつかの手掛かりをもとに、一緒にチャレンジしてみましょう。



オウィディウス、『祭暦』（高橋宏幸訳、国文社）
5 月の記述から

(194-213 の一部)

女神が話すと、口からは涼しい薔薇の息吹が洩れました。
...

いままでこそフロラ Flōra と呼ばれる私も、かつてクロリス Χλωρίς, Khlōris と言っていました。

ギリシア名であった私の名がラテンの呼び名に崩れてしまったのです。かつてクロリスと言っていたとき、私はかの幸福の野、おまえも聞いているでしょう、その昔に至福のひとびとの国があったという野のニンフでした。

...

春のこと、そぞろ歩きをしている私がゼフィルス Ζέφυρος, Zephyrus の目に止まりました。

私は引き返そうとしました。
が、ゼピュルスは追いかけてきます。
私は逃げます。

...

私はいつも春を謳歌しています。
いつでも一年でもっとも輝かしい季節、木々には葉が繁り、大地はいつも牧草がおおいます。

...

何度も私は、いったい何色あるのかと、並んだ花を数えたいと思いましたが、できませんでした。

数が及ばないほどたくさんだったのです。

朝露の滴が葉からこぼれ落ち、色とりどりの草花が陽の光に暖められるや、ただちに彩り鮮やかな衣を身にまとった季節女神ホラ Ὥρα, Hōra たちが集まり、私からの贈り物を籠に摘んでゆきます。

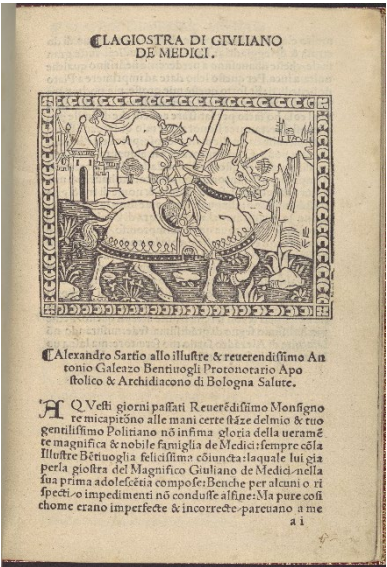
それにすぐさま優雅の女神カリスたちも加わって、冠を編み、編んだ冠を神々しい髪に結ぼうとします。

ポリツィアーノ、『ジュリアーノ・デ・メディチの馬上槍試合のための八行連詩』第一巻から

Ma fatta Amor la sua bella vendetta,
mossesi lieto pel negro aere a volo,
e ginne al regno di sua madre in fretta,
ov'è de'picciol suoi fratei lo stuolo:
al regno ov'ogni Grazia si diletta,
ove Biltà di fiori al crin fa brolo,
ove tutto lascivo, drieto a Flora,
Zefiro vola e la verde erba infiora.

(一部試訳 犬塚)

アモルは見事に仕返しして
闇の空を喜び翔ける
急ぎ来るは母の王国
小さな兄弟たちが集うところ：
美神たちがそれぞれに楽しむ王国
花の冠が結ばれ
フローラを追い求めて
ゼフィロが飛び、緑なす草は咲きほころぶ



…エロースがかりに一種類なら、今のままで結構だろうが、しかし事実是一种類ではないのだからそれでは困るのだ。

…

アプロディテはエロースと不可分の関係にある。したがって、この女神が一種類なら、エロースは一種類であろうが、しかし二種類であるから、エロースもまた必然的に二種類である。

…

一方のアフロディテは、思うに、年上で、ウラノス Uranus を父とし母なくして生れた者で、この女神に対してわれわれはウラニオス・アプロディーテ Ἀφροδίτη Οὐρανία, Aphrodītē Ouranía という称号を奉っている。他方、年下の方はゼウスとディオネの間に生れた娘で、この女神をわれわれはパンデモス Πάνδημος, Pándēmos と呼んでいる。こういうわけだからして、エロースもまた必然的に、一方のアプロディテに協力する方はパンデモス、他方はウラニオスと呼ばれるのが然るべき呼ばれ方である。

…

パンデモス・アプロディテに属するエロースは真に低俗(パンデーモス)で、そのなすところは、行き当りばったりのでたらめなものである。

世界の魂に二柱のヴィーナス(美)があるとしましょう。最初のものは聖なる天上の、そしてもう一つのものは世俗・地上の。どちらにも愛(エロス/アモル)を伴わせましょう。神的な美を観照する(深く思考する)天上のものと、この世界のことについて同じものを生みだそうとする地上のものと。第一のものが見ているような美を、第二のものはこの世界の機構に受け渡そうとします。あるいはむしろ、両者は美を生み出すように突き動かされますが、その仕方はそれぞれ違います。天上のヴィーナスは、より高位のものの美をできるだけ正確にそのものの内に再生しようと、その知性を通して努めます。地上のヴィーナスは、その神聖な種の豊穡を通して、それ自体の内に神的に孕まれている美を、この世界の事々の中に再び生じさせようと努めます。

……………

最初のヴィーナスは、天使的な精神にあり、天上界に生まれます。彼女には母親がいなかったと言われています。なぜなら、自然哲学者によれば、母(mother < māter)は物質(matter < māteria)の意味を内包するからであり、天使的な精神は物質性を持たないからです。第二のヴィーナスは、世界の靈魂であり、ユピテルとディオネの娘と呼ばれています。ユピテルによって意味されているものは、世界靈魂の内にある力であり、目に見える天界を動かし、すべての下位のかたちあるものを生成させるものです。そして、これが物質の中に注入され一体化するように現れるため、第二のヴィーナスは、母親を持つといわれます。つまり、ヴィーナスには二面があるのです。天使的精神における知性と、世界靈魂の生成力との。そのどちらもが、愛(エロス/アモル)を伴います。本有的な愛によって、最初のものは神の美を観照することを余儀なくされ、第二のものは、物質的な形態の中にこの美を再生成することを余儀なくされます。一方は神の輝きを受け入れ、他方にそれを注ぎ込みます。そして他方によって、その栄光のきらめきが、世界の体に与えられるのです。

私たちの精神は最初のヴィーナスに対応しています。そして美のこの神的な由来によって、視覚に人体の美が現出する時に、精神は、敬虔な愛へと突き動かされます。そのことは、第二のヴィーナスである、私たちの内の生成力が、類似の形質を生成するように刺激されることに対応しています。愛は双方に働くのです。一方においては、観照することの願望として、他方では、美しいものを生み増やそうと。実のところ、それぞれの愛は神の似姿の愛であり、それぞれが純粋なのです。



プリマヴェーラ, サンドロ・ボッティチェッリ, 1482 年頃, ウフィツィ美術館, フィレンツェ

